

ビーチャームからロックへ：
17世紀のジェントルマン理想と教育

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安川, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20592

ビーチャムからロックへ

——17世紀のジェントルマン理想と教育——

安川 哲夫

From Henry Peacham to John Locke : The Ideals and Education of the Gentleman in the Seventeenth Century

Tetsuo YASUKAWA

はじめに

筆者はこれまで18世紀に焦点を合わせ、ジェントルマン概念の変容と教育目的との、あるいは社会的榮譽と教育の内容・形態との相互連関について考究してきた¹⁾。が、そこにおいて意識せずにいらなかったことは、これらの連関が過去と固く結びついており、歴史的伝統が驚くべき力強さと永続性を有しているという点であった。

改めて述べるまでもなく、〈gentleman〉という言葉はラテン語の〈gentilis homo〉(高貴な身分の人)に由来し、フランスを経由してイギリスに導入された。OEDは文献に現れた初期の事例を1275年としている。またそれが社会的地位を示すものとして公文書に登場したのは15世紀に入ってからで、最初は長兄の館や大貴族の城館に寄食した貴族の次三男を意味したようである。しかし16世紀には、その呼称に多分の曖昧さをあわせもつものの、社会の位階的序列を示すカテゴリーとして一般に確立されていく²⁾。地域一円の住民の支配者として、また政治、経済、社会、文化の中核的存在としてのジェントルマン概念の成立・定着に果たした人文主義と古典教育の影響についてはすでにたびたび触れられているが、しかし、それが以後いかな

る発展を遂げていったかについては、これといたたまつた研究がないようである。これが、内乱による一時的な中断はあったものの、近代イギリス教育思想の歴史的展望を困難にさせている原因のひとつにもなっている。

16世紀に成立を見たジェントルマン理想は、決してそれ自体として固定されることはなかった。ジェントルマンは、絶えずその尺度を更新させながら自己変容を遂げ、各々の時代の最も価値ある人間類型・文化理想として、人々の日常生活行動様式を規定するまでに浸透していった。この新たな人間類型や文化理想の創造は、既存のジェントルマン層が自己の社会的な威信や名譽を守るために行う場合であれ、また身分的には緊張・葛藤の関係にあった中流市民階層が既存のモデルを批判して行う場合であれ、一貫して教育に負うており、その点からもジェントルマン理想の社会的・文化的な発展と教育の歴史は密接に結びついている。

本稿は、こうした観点から、ひとつの階級理想としてジェントルマン概念が定着してくる16世紀後半から、ロックや『スペクテーター』によって幕が落とされる18世紀前半までの時代を対象に、ジェントルマン理想と教育との相互連関、相互作用を、歴史の発展段階に従いながら解明しようとするものである。

I 「ヴァーチュオーソ」理想の成立 ——エリオットからピーチャムへ——

16世紀前半にエリオット (Sir Thomas Elyot, 1490?-1546) が唱えた「教養ある為政者」=ジェントルマン理想は、世紀後半には学問を貴族の本質的な構成要素の一つとみなすまでに浸透した。が、皮肉なことに、学問がジェントルマンに切っても切り離せないものとして社会的承認を取り付けていくにつれ、〈nobility〉や〈gentility〉に占めるその価値は相対的に落としめられていく。一定程度の富と才能がありさえすれば、学問は誰でもが獲得することができるからである。実際、学問を通してジェントルマンになった人々の存在は、土地を買取って地方の名士となっていった人々と同様、多くの者の目にとまった。当代の作家たちは、学問と徳の賞賛においては基本的に一致していた。だが、学問を貴族やジェントルマンの存在根拠とすることには大いに疑問を呈した。例えば、1595年に出版された『ジェントルマン』という表題を持つイタリアの書からの翻訳書は、騎士道の時代においては学問と富はジェントルマンを作るものとして認められておらず、あくまでも貴族の装飾物でしかなかった、と強調した³⁾。こうした論調は16世紀末から17世紀前半に一般に見られる傾向で、作家たちの多くは、ジェントルマンの贅沢や浪費を非難する以上に、当時〈upstart〉と呼ばれた「成り上がり」を階層秩序を破壊する危険な存在として攻撃した。問題の核心は、何がジェントルマンをジェントルマンたらしめるのか、という点にあった。

17世紀の教育コメンテーターたちは、このレーゾン・デートルの問題に関わって、ジェントルマンがその社会で生き残り、成功するためには何が必要か、下から彼らを脅かす成り上がりに対してはいかなる点で優位を保持すべきかを説いた。そしてこれは、世紀前半、二つの対照的な方向をとって現れてきた。ひとつは、16

世紀の人文主義者の教養理念を発展させた「ヴァーチュオーソ」(Virtuoso)理想に向けての教育であり、これはピーチャム (Henry Peacham, 1576-1643) の『完全なるジェントルマン』(The Compleat Gentleman, 1622)によって準備された。もうひとつは、教養の理念のもつ不確実さから土地所有を基盤確保の第一において、父親が息子に対して行った「訓戒・助言」形式の教育である。この典型はエリザベス朝末期の代表的な二人の政治家、バーリー卿ウィリアム・セシル (Lord Burghley : William Cecil, 1520-98) の『死に際して父が息子に与える、生活を正しく律するための訓戒』(Certain Precepts for the Well Ordering, of a Man's Life by a Father to his Son at his death. 1617) とサー・ウォルター・ローリー (Sir Walter Raleigh, 1552-1618) の『息子への訓戒』(Instructions to his Son, 1632)に見出される。両者の流れは時を同じくして現れ、ジェントルマン階層の危機意識の先鋭化という点では共通していた。しかし、教育理論の発展段階から見れば、前者が後者に先行している。

ヴァーチュオーソは17世紀初頭に生み出された新しい人間類型である。彼は余暇と富を持つジェントルマンで、そのあり余った時間、エネルギー、富のはけ口を、古代文物の研究、古代彫刻・絵画の購入、疑似科学的実験に費やした。この古代への探究心、芸術に対する美的な理解、有名なコレクションの収集からやがて海外旅行ブームが惹起され、ひとつの教育制度として確立されていく。ヴァーチュオーソの野心は、作家、知識人、芸術家、科学者のパトロンになることであって、専門家としての成功とか、金銭的な富の所有といった功利的な目的には向けられていない。関心の対象はあくまでも自分自身であり、君主や国家への貢献など眼中にない。要するに、彼は、美術品や骨董品の収集家にして鑑定家 (connoisseur) であり、真に趣味良きジェントルマンなのである⁴⁾。

ヴァーチュオーソの源はルネサンスにある。

イタリアのウルピノ宮廷の貴族だったカステリョーネは、「完全な宮廷人」は戦時と平時において君主に役立つよう準備されていなければならないと強調し、詩作、絵画、音楽を愉しみと気晴らしの源泉として推奨していた。むろんこれらの教科はそれ自体としては評価されていなかったのであるが、それらがそれ本来の社会的な機能を終え、人間形成に占める地位を越え出るとき、宮廷人の嗜みはヴァーチュオーソの趣味となる。だがこのことは、「ジェントルマン＝為政者」の養成を著しく強調していたエリオットの時代には決して起こってはこなかった。

エリオットの『為政者論』からピーチャムの『完全なるジェントルマン』への移行にはいくつかの要因が考えられるが、まず第一に考慮されるべきは、エリザベス朝に起こったイタリア文化の広汎な受容と発展であろう。カステリョーネの『宮廷人』(1528年)は、1561年にトーマス・ホビー(Thomas Hoby, 1530-66)によって“*The Book of the Courtier*”として出版され、社交を中心とした優雅な宮廷生活がジェントルマンの生活の範として一般に確立する。そして服装、食事、会話のマナーなどについて事細かな作法一般は、ピーターソン(Robert Peterson)によるデラ・カッサの『ガラテオ』

(1558年)の英訳(*Galateo ; Of manners and Behaviours in Familiar Conversation*, 1576)によって容易に獲得可能となった。こうした礼儀作法書の広汎な人気、統一的な上品な振る舞いへの関心の移動は、すでにN. エリアスが明らかにしたように、様々な社会的身分の出から成る新しい上流階層が新しい貴族を作ろうとする要求と対応していた⁵⁾。エリザベラ朝後期のこの時代意識の中で、学問や文芸的教養は政治的・道徳的な有用性から切り離され、装飾のための具、名声のための手段、階層区分の指標となっていく。

ヴァーチュオーソ理想の出現の背後には、また、当時ジェントルマンたちが共通に抱いていた時代の心性があった。王位継承をめぐる政治

的危機が一段落した1620-30年代のイギリスには平和な時代が訪れていた。しかもこの時代には、前世紀の政府役職の拡大は終わりを告げ、宮廷での貴族・ジェントリの勤め口も短期間であった。加えて、地方の長官職には宮廷から官僚が派遣されていたため、在地のジェントルマンで有用な雇用を見出すことができたのは少数の者に限られていた。このため、多くの者は活動的生活に対する機会を減少し、また願望も少なくなつて、田舎の邸宅に引込む時間が多くなった。

富と余暇の増大はスチュアート朝ジェントルマンを憂鬱なものにさせていた。彼らは孤独と怠惰の中に埋もれがちであった⁶⁾。情緒的に満足できる代わりのものを見出す必要に迫られていた。憂鬱症を時代の病弊と捉えたのはR. バートン(Robert Burton, 1577-1640)であった。彼は、ピーチャムの書の一年前に出版された『憂鬱の解剖』(*The Anatomy of Melancholy*, 1621)という書の中で、憂鬱症が引き起こす様々な側面を多面的な視角から分析し、その治療救済の策として、詩、歴史、言語といった学問のほか、彫像、宝石、大理石細工、イタリアおよびオランダ絵画、建築、紋章、コイン、ローマの古代遺物などの研究・鑑賞をジェントルマンに適したものとして推薦していた⁷⁾。学問はもはや世間での栄達や人格的な完成のための手段とはみなされず、余暇を「学問の愉しみと喜び」の中で過ごす生活の様式となった。

折しもこの時期、高名な貴族たちの間に古代遺物への愛好と収集が芽生えていた。ソマセット(Somerset)伯は最初の主要な収集家の一人であった。彼は1614年にまとめたイタリア絵画を買うため交渉に出掛けた。そしてこの頃、アランデル伯爵(Earl of Arundel, Thomas Howard, 1585-1646)は、メダルや沈み彫り彫刻宝石、絵画、大理石の驚くべきコレクションを築き始め、1621年にはバッキンガム(Buckingham)公爵も大規模にこの分野に進出した。そしてこの二人の人物から、やがて国王チャール

ズ一世 (Charles I, 在位 1625-49) は芸術に対する情熱を得、大規模なギャラリーを築くため 1628-30年間に18,000ポンドを費やした。彼らの影響の下、ヴァーチュオソ理想は徐々に地方のジェントルマンの間にも広がり、公共の福祉に代わって、絵画、コイン、彫刻などの知識とコレクションがこの時期のジェントルマンのステイタス・シンボルのひとつとなっていく。

ところで、ヴァーチュオソの研究者 W. E. ホートンは、その語がイギリスで用いられた最も初期の事例としてピーチャムの『完全なるジェントルマン』を引用しているが⁹⁾、実は、その書こそヴァーチュオソのための一種の便覧を用意し、その普及・定着に大きな影響を与えていった作品のひとつであった。

『完全なるジェントルマン』は、「高貴なジェントルマンに要求される、心身に関する最も必要かつ賞賛に足る資質で、彼を完璧に仕立てる」という副題をもつ⁹⁾。「献辞」はアランデル伯の三男ウィリアム・ホワード (William Howard) に向けられている。これらのことから容易に想像されるように、この書はこれからジェントルマンになろうとする人々のために書かれたものではない。ジェントルマンとして生まれてきた人間により一層の磨きをかけて、「絶対的で完全なるジェントルマン」に「仕立てる (fashion)」ことを意図して書かれた教育書である。彼がジェントルマンの属性をダイヤモンドの比喩を用いて自然性に求めているのも、これによる。

ピーチャムは、この書を著す以前から、最上流階層の間で明確な意識をもって現れていた新しい時代の空気を吸っていた。彼は、パトロネジを求めて若き皇太子ヘンリー (17世紀初頭のヴァーチュオソの指導的存在であったが、1612年に18歳の若さで夭折) の周辺に集まっていた人々の一人で、1610年には国王ジェームズの『王の贈り物』(Basilicon Dorom, 1599) からの抜粋集などを皇太子にプレゼントしていた。こうしたことからピーチャムはアランデル伯の知己を得、伯の長男たちのチューターとして、

1613年から二年間にわたってフランス、イタリアなどを見て回った。「イギリスのヴァーチュオソの本当の父」¹⁰⁾と称されるアランデル伯が彼の実質的なパトロンで、ピーチャム自身、伯が集めたコレクションを館で目にしたに違いない。『完全なるジェントルマン』はこうした縁で伯の三男ホワードの10歳の誕生日の贈り物として上梓された。初版は全16章であったが、1627年版には「軍事教練」と「釣り」が、そして1634年版には「古代文物」と「古代および近代の様々な紋章」が追加され、全20章になった。1661年に再刊。

冒頭の「献辞」によれば、公刊の目的は、世間にあまた学問や規則があるにもかかわらず、神に背き、世間の流行に押し流され、さもしい怠惰な生活の中に埋もれている「無知の時代の専制」から、また「最良の衣服を着、惰眠をむさぼり、たらふく飲み食いし、何も学ばないことのために存在している普通の教育」から、ホワードを「救い出す」ことにある。このため彼は、学問の知識を「すべての相談や教訓の泉」「最も甘美で最も幸福な生活の基礎」と考え(献辞)、そして、エラスムス、ヴィーヴェス、エリオット、アスカムらに恩義を受けていることを正直に認めながら(読者への辞)、彼らと同様、学問がいかん「生活とマナーを矯正し、国家の統治に対して健全な助言を与えるか」¹¹⁾について言及する(第2章)。ピーチャムは知識に集中してマナーや肉体的な訓練を軽視したのでは決してなかったけれども、彼の学問志向は明らかに以前の改革者とは異なる新しい方向を目指していた。このことは次の一文を見れば明らかである。

「高貴な生まれの者でしかも学者である者は、生まれ良き者と教養ある者という二重の名譽に浴する。というのは、その人間は、最も明瞭な色彩であるこれらによって遠くからでもはっきりと識別され、愛と賞賛を共に勝ち取り、そうして生活に対する自己のイメージを巧みに高め、それを価値あらしめ、子孫

代々まで永續させることができるからである。」¹²⁾

学問の必要性の力点が、政治的社会的価値よりもむしろ名声や賞賛、他から自己を区分するための指標を獲得する手段としての価値に置かれていることに注目しよう。前世紀の改革者たちが学問の威厳的価値について全く気づいていなかったというのではないが、ピーチャムはことさらにこの観点を強調する。こうした学問態度には、紋章乱造の時代にあつて（1611年には准男爵が創設される）、ジェントルマンの地位が金で買われ、その結果、家柄や生まれの良さといった伝統的なジェントルマンの価値基準が危うくなってきたことへの危機感が強く働いている。彼は言う。

「最もよく見られる最悪の事態は、あらゆる所で紋章と名誉とが金で買われているということである。これは本当の貴族にとっても、また国家にとってもきわめて有害である。」¹³⁾ それゆえ、

「我々の時代の共通のペストに対する解毒剤としての、この（私は学問について言っているのだが）最初の効用は、あなた方の知性が学問によって世界で最も豊かな才能で高貴化され、またそれによってあなた方が自らの真価を知るようになるという点にある。」¹⁴⁾

かつてそれほど明確な姿をとっていなかった階級意識が、ピーチャムを前世紀の人文主義者から分かつ大きな要因となっている。では、こうした意識や態度はどこから生じてきたのだろうか。何ゆえに学問が「時代の共通のペストに対する解毒剤」として称揚されるのか。またその学問は一体いかなるものであったか。

危機意識の発生的一端は、人文主義の宣布の下、貴族が教養を高めようと努力してきた結果によるものだ。なるほど「教養ある為政者」理想は宮廷の権威を増大した。がしかし、それは同時に新種の教養人の発達を促し、彼らとの間に設けられていた社会的な差異や隔たりを希薄なものにしてしまった。貴族の「宮廷人＝社交

家」理想は、「学問人＝教養人」理想を自己のうちに取り込むことによって、階層区分の不明確化という危機を自らに招き入れたのである。この危機を、ピーチャムは、人文主義の伝統に従いながら、学問を誰も真似のできないものにまで高貴化し——趣味化と呼んでも良い——、それによって再び差異を生産することで乗り切ろうとする。

かかる態度は自ずとジェントルマンが学ぶべき学問そのものの質の転換を迫ることになる。彼がジェントルマンに要求する教科は、一世紀前にエリオットが求めた君主や国家への貢献のための政治的・道徳的な学問ではもはやない。ジェントルマンに「有用」でかつ「最も心地良く賞賛すべき学問」（献辞）として提示されるのは、絵画、紋章学、それに古代文物である。特に紋章学は彼が最も力を入れた教科のひとつで、図入りで解説されたその章（第13章）は、全体のバランスを失するほど大きな部分をなしている。そこに付された推薦理由は、ピーチャムがいかなる観点から学問を捉えていたかを知る上で極めて興味深い。彼は言う。

「長所を認めたがゆえに、我々は貴族に真の価値、尊敬、称号を与えることができたのではなかったのか。だとすれば、昔から神聖で尊いものだとみなされてきた徳のこうした外的な記章なしに、どうして我々は貴族の長所を推測することができようか。また、それなしでどうして我々は、昨夜のきのこ同様一晩で大きくなった成り上がり者（upstart）を、由緒正しき、価値あるジェントルマンから識別することができようか。」¹⁵⁾

ピーチャムは、相続や家柄の古さによってしか獲得されず、またそれを所有している階層においてのみ意味を有するこうした学問によって、ジェントルマンの連続性を物質的に証拠立てし、時間の永續性のうちに社会的自己同一化と神聖化を図ろうとする。言葉を換えて言えば、彼は、誰でもが学べるような学問ではなく、仮に学んでも、学問で身を立てようとする人には

価値がなく、地位と富と余暇のある人によってしかその利益が享受されないような学問によって、ジェントルマンの社会的卓越性を保証しようとするのである。

この戦略が単に貴族だけを対象としたものではないことは明白である。彼の本当のねらいは、「成り上がり」者たちからの侵食をまともに受けていたジェントリ層にあった。すでに述べたように、中央や地方の官職から離れた彼らは、この時期、田舎の邸宅に隠遁し、メランコリーという17世紀初頭の社会病を患っていた。「飲み食いし、神をののしり、女を買い、ファッションに流され、正しいことを全くしないことが、今日のわが国のジェントリの大部分の属性であり、指標である。」¹⁶⁾とピーチャムは言う。そうした彼らを「時代の墮落」から救済し、将来国家に事が起った場合に、公共の福祉に貢献することができるように準備してやること、このことのために『完全なるジェントルマン』は書かれ、具体的には、歴史、宇宙形態誌、自然観察、幾何学、詩、音楽、絵画や製図、紋章学、身体の訓練、釣り、それに彫刻や碑文やコインなどの古代文物の科目が推奨された。絵画や製図の推奨理由は、この点で、特に示唆的である。

「私はまた暇な時の練習についても責任をもたなければならない。それは最も推奨するに足る資質で、ジェントルマンには大いに役立つ。もし戦争に従事して国家に奉仕しなければならないような場合、あなた方はこれらの助けがなければ、策略を立てることも、砦を作ることも、大部隊を整列させることもできないであろう。」¹⁷⁾

かくして、階級的な危機意識に促されて成立したピーチャムの「ジェントルマン＝ヴァーチュオーソ」理想は、16世紀の人文主義とは異なる新たな文化獲得様式を確立させることになる。というのも、その理想の実現は、方法が最も目に見えない様式であればあるほど確約され、支配階層の不変要素として基礎づけられるからである。ここに海外旅行（1622年の初版は

この章で結ばれている）がジェントルマン教育の重要な一環として積極的に意味付けされ、推奨されていく。

ところで、17世紀、教養の理念を肥大化し、学問を趣味化していくこうした傾向に対し、批判が全くなかったわけではなかった。世紀初頭、ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) は、好奇心や一人よがりの欲望の満足のために研究することに反対し、人類の利益と幸福に役立つ学問研究を提案していた。そしてこの思想は、30年代から40年代にかけて、ピューリタンの教育改革者たちによって受容され、有徳的で勤勉なピューリタン・ジェントルマン理想の形成を育んでいく。第二の批判は、教養の理念の虚しさを自覚した支配階層＝地主自身からやってきた。彼らは、ジェントルマンを真にジェントルマンたらしめるのは教養ではない、それは彼らの実質的な社会的基盤をなしている土地財産であり、その管理こそが第一に息子たちに教えられなければならない、と主張した。ローリーの『訓戒』はその初期の作品のひとつであったが、これを嚆矢として、復古期、多くの貴族・ジェントリが多数の「訓戒」や「助言」を書き残した。そして最後に、貴族趣味を色濃く漂わせたヴァーチュオーソ理想は、17世紀後半から18世紀初頭にかけて、新たに台頭してきた市民階層からも徹底的に非難された。

以下、ヴァーチュオーソ理想に抗して現れた上の三つの動きを中心に、以後の教育の展開を追ってみたいと思う。

II ピューリタン・ジェントルマンの教育論

ヴァーチュオーソは研究者としての側面は多分にもっていたとしても、決して学者ではなかった。彼らにとって重要なのは、知識それ自体であって、それが人類にいかに関与するかという観点は全く問題ではなかった。コイン、絵画、彫刻の知識や収集は、それらが好奇心を呼び起こし、心地良さを刺激し、社会的な威信を

保証するがゆえに、それ自体として評価された。自然の研究もそうした一環として、世紀中葉以降、珍品や絵画の収集に代わって勢力を得ていた。とりわけ1662年に「王立協会」が創立されてからは、ヴァーチュオースという言葉も科学の分野におけるコレクターあるいは疑似科学者を指すようになっていった。因に、この種の最も典型的な人物として、我々は、後世『日記』作家として知られることになるサムエル・ピープス (Samuel Pepys, 1633-1703) を知っている。協会を「ヴァーチュオースたちのカレッジ」と呼んだ彼は、科学には全くズブの素人であったにもかかわらず、1684年にその総裁の座に就いた。

自然の研究はまた別の要因からも促されていた。例えばピーチャムは、第八章「地上の調査・観察について」において、「観想、即ち、自然(というよりは全能の英知)が、いかに計り知れない巨大な働きによって、地上の動物や空中の鳥と類似したものを海の中で示してくれるかを考察することは、素晴らしいことだ¹⁸⁾と述べ、自然の研究を神の全能、英知、威厳を最も良く教えてくれるものとして勧めていた。その限りで言えば、自然の学問に対するヴァーチュオースの態度は、理論的には、自然を神の第二の書物として弁護したベーコンと同じ精神にあったと言ってよいであろう。

『17世紀の科学と宗教』の著者R. S. ウェストホールは、こうした観点から、内乱期に「目に見えない大学」(invisible college)に結集したヴァーチュオースこそ、自然科学の発達を促進することに積極的な関心を持った人々であったと位置づけ、彼らを通して17世紀の科学と宗教の相互作用の側面を明らかにしようとした¹⁹⁾。しかし広い意味で捉えるならば、ボイルなど大学に籍をおく少数の科学者を除けば、そうした科学者はほんの少数で、ヴァーチュオースの研究は学問の発達には大した貢献をしなかった。実際問題、彼らは神の異常な働きを強調し、稀なるもの、驚異的なものを礼賛する傾向にあっ

た。

ヴァーチュオースを直接念頭に置いていたわけではなかったけれども、ベーコンは彼らとは異なるもう一つのアプローチを自然の研究に対置させた。彼に従えば、学問や知識の真の目的は、「知識を心の楽しみとか、争いのためとか、名声のためとか、利益のためとか、権力のためとか、その他この種の低いことのためにではなく、人生の福祉と効用のために求めること、それを愛のうちになしとげ支配すること²⁰⁾にあった。彼の忠告はヴァーチュオースの欲望を修正するほど強力ではなかったが、その思想は、40年代、ピューリタンの改革者たちに継承され、「有用な科学や技術」のための教育論を導いていくことになる。

ピューリタニズムは精神の内面の働きを強調して出発した純粋に宗教的な運動であった。従って当初は、科学の技術的な応用と物質的な幸福の増大を主張する世俗的なベーコン主義とは直接結びつくことがなかった。両者の関係については1960年代に様々な論争が呼び起こされたが、決定的な「平行関係」は見出されなかった²¹⁾。ここでは、内乱期に議会派と結びつき、ベーコン主義の受容に積極的であったハートリブ (Samuel Hartlib, 1600-62)、デュリー (John Dury, 1596-1680) を中心としたグループに焦点を絞って議論することにしよう。

ピューリタンの改革者たちにとっての第一義的な課題は、現世に神の王国を実現することであった。このため彼らは、学問と敬神を促進し、子どもたちを共和国の有益な人間 (good commonwealth man)にまで教育しようとした。「敬神の道」(the way of Godliness)と「社会奉仕の道」(the way of Serviceableness towards the Society)が改革の二本の柱であった²²⁾。彼らはいち早く学校の改革に着手した。なぜなら、「教会と国家を改革する最も手っ取り早い方法は、学校を改革すること」にある、と考えられたからである²³⁾。

改革者たちの関心は、①学校の再編成、②教

育内容の改造, ③新しい教授方法の確立の三点に絞られていた。学校の制度的な改編においては、彼らは初等教育を充実させることに力点を置いた。しかし、高等教育を無視したわけでも、既存の位階的な階層構造を破壊しようとしていたのでもなかった。デュリーは一連の改革案のなかで四種の学校を構想したが、そこで提案された学校体系は、コメニウスが考えたような単線型の体系ではなく、各階層の必要に応じた制度をとっていた。それは、全ての国民に教育を与える「コモン・スクール」(Common School)、地域の必要性に応じて庶民に機械的な諸科学を教える「職業学校」(Mechanicall School)、公共の福祉のために貴族やジェントリの子弟を教育する「上級学校」(Noble School)、改革された教師や牧師を育成する「教師学校、牧師学校」から成っていた。

教育内容に関しては、彼らは「有用な科学や技術」を全ての教育制度の中心の特徴とした。そうすることで、伝統的な「学芸的」教科もっている教育秩序を転換しようとしていた。言語は必要であるが、それは学問を拡大すること以外には役に立たないと考えられた。科学はまた、人間本性を回復し、理想的な国家を実現するための手段とみなされた。このため、教育の方法においては、「言葉」よりもむしろ「事物」(Res)が優先され、コメニウスの「汎知学」や教授方法の積極的な導入が試みられた。

この時期、上流階層の教育について積極的な発言をしていたのはミルトン(John Milton, 1608-74)であった。ハートリブの求めに応じて書かれた『教育論』(Of Education, 1644)で、彼は12歳から21歳までの約150人の貴族・ジョントリの子弟(付き添いを含む)を対象としたアカデミーの設立を提案した。学校と大学を統合したアカデミーは、古典教育を柱にチュートリアル・システムと寄宿制を採用していたが、それが既存の学校と決定的に異なっていたのは、学問の目的規定においてであった。ミルトンは、同時代のピューリタンの改革者らと同様、学問

の宗教的目的を第一義的に強調してこう言う。

「学問研究の目的は、神を正しく知ることによって我々の始祖の墮落を回復することであり、その知識から神を愛し、神に倣い、そして、我々の魂に真の徳——それは信仰という天の恵みと結びついた時に最高に完全なものとなる——を所有せしめてできる限り神に近づくことで、神の似姿となることにある。」²⁴⁾

ジェントルマンは、地位や名誉を求める以前に、何よりもまず、敬虔なキリスト教徒であることが求められた。そして「学問研究と徳の賞賛の念に燃え、勇敢な人間、立派な愛国者となり、神に愛せられ、万世に名を残すという高度な生活意欲にかきたてられ、将来、活動的な生活部門において「高名で比類なき人間」となることが期待された²⁵⁾。このことのためにミルトンは、農業、自然哲学、生理学、天文、地理、医学、築城法、解剖学、鉱物学、詩、倫理学、政治学、法律、神学、歴史学、雄弁術、論理学、修辞学など、実に多くの実際的な教科を推薦した。ピューリタンの信仰と学問に裏付けられたかかるジェントルマンの育成こそ、共和国樹立に向けて打ち出されたミルトンの、またハートリブに集まる人々の重大な教育課題のひとつであった。

「有用な科学と技術」を、またそれを「神の栄光のため」(ad gloriam Dei)という宗教的な動機に基づけて要求するハートリブ・グループの改革運動は、ルネサンス宮廷とその文化・道徳に対する決然とした反抗であった。そしてその有徳的で勤勉なピューリタン・ジェントルマン理想は、宮廷に巣くうヴァーチュオーソ理想に対する明らかな異議申し立てであった。彼らの主張は、ピューリタンの信仰をもつジェントルマンたちに支持されたばかりでなく、地方を犠牲にして収入を増やす宮廷とその廷臣に対して、また君主の愚行と官僚の腐敗に対して憎悪を抱いていた地方の党派とも結びつき、長期議会の中で勢力を得た。トレヴァ=ローパーは、

かかる観点から、この時期イギリスで活躍したコメニウス、ハートリブ、デュリーの三人の外国人プロテスタントを「イギリスの地方派の知的接着剤」と規定した²⁶⁾。

ところで、周知のように、ピューリタンの社会改革や教育改革の理念と情熱は、クロムウェルの死と共に歴史の表舞台から消え去っていった。ミルトンの提案も実行に移されなかった。実際の生活に役立つ教育を与えたいという彼らの願いは、ピューリタン支配の終焉を告げた1660年以後は、体制から切り離された非国教派のアカデミー (Nonconformist Academy, Dissenter's Academy) においてわずかに生き延びていくだけであった。しかし我々は、勤勉を美德として賞賛するその理想が市民の徳を形成し、やがて「実務家」=ジェントルマンを育てていくのを看過してはならないであろう。

III 教養ではなく土地を ——「訓戒・助言」の教育論——

さて、1660年の王政復古はあらゆる面で歴史の大きな転回点に立っていた。それは、政治史上においては国王と議会の復活を意味したが、貴族とジェントリの社会的指導者としての威光をも「復古」させていた。社会の局面は確実に宗教的な局面から世俗的な局面へ——トレヴァーローパーの言葉を借りて言えば、「ルネサンスの気候」から「啓蒙主義の気候」へ²⁷⁾——と移っていた。教育思想史上においては、このターニング・ポイントにロックの『教育論』(1693年初版)をおくのが普通であるが、それへと進む前に、我々は、復古期に堰を切ったように大量に出現してきた「訓戒・助言」形式の教育論——例えば、カーベリー伯『息子への助言』(1651)、フランシス・オズボーン『息子への助言』(1656/1658)、ヒュー・ピーターズ『死にゆく父の最後の遺産、娘への助言』(1660)、アーガイル子爵『息子への訓戒』(1673)、ジョサイア・ディア『息子への最後の遺産』(1673)、ハ

リファックス子爵『娘への助言』(1688)、フェアファックス男爵『若き男爵への助言』(1691)——の存在に注目しておかねばならない。

一般に「訓戒・助言」は、自己の経験を範とし、そこから学んだ内容を後継者に伝えるという性格からして、著者が生きた時代が敏感に反映されている。それゆえ、オズボーン (Francis Osborne, 1593-1659) の『息子への助言』(*Advice to a Son*, 1656) に代表される復古期の助言群も、世紀前半に評判を博したパーリー卿やローリーのそれとも異なっている²⁸⁾。こうした差異や制約にもかかわらず、この種の教育論にはきわめて類似した性格が見出される。では、その一般的な特徴は何か。何が復古期にかくも多くの助言を生み出させたのか。またそれが固有に有する時代的な特徴は何か。これらの点に注目して、以下見ることにしよう。

すでに我々は、16世紀後半あたりからジェントルマンが土地を手放し、それを買取った成り上がり者が重要な社会問題となっていた事実を指摘しておいた。一般に、地主であるジェントルマンが土地を売却せざるを得なくなるのは、借金の返済のためである。彼らは、その存在を誇示するために、田舎の所領の管理をやめて都会に住み、当世流行のきらびやかな衣装で身を飾り、酒や賭け事などの愚行に耽っていた。威信保持のためのこうした「衝動的消費」ゆえに、彼らは所領を抵当に高利貸しや商人、法律家、医者、聖職者から借金をした。こうして困窮に喘ぐジェントルマンの存在が浮き彫りにされてくるのであるが、復古期のジェントルマンを取り巻く状況も、基本的には、何らこれと変わるところがなかった。

土地はジェントルマンの依って立つべき“現実”をなしていた。父から子へと代々相続されてきた土地の所有こそが、彼らの政治的、社会的権力の基盤であり、一定の生活様式を維持するための基礎であった。土地を失うことは、それゆえ、ジェントルマンの存在の深みからの危機を意味していた。従って親たちは、いかなる

不運にみまわれようと土地は絶対に手放すな、贅沢な生活はやめて節約するようと、絶えず口を酸っぱくして息子に語っていた。そしてその忠告は、友人や妻の選択から、子弟の教育、結婚、出費、所領管理、旅行、宗教に至るまで、非常に広範囲に及んでいた。

対象の広さとともに、与えられた指示の内容がきわめて具体的かつ実用的であるところにも、「訓戒・助言」形式の教育論は大きな特徴をもっていた。例えばローリーは、妻の選択に際して、美貌を基準とするな、恋愛と結婚とは別だ、かといって醜い女との結婚は、子供に影響するから絶対に止めておけ、と忠告していた²⁹⁾。こうした実用性の強調は、教養ではなく実際に役立つ処世の術が、学問的知識ではなく経験から得られた世間の知恵が、人間に現実を保証し、ジェントルマンを真にジェントルマンたらしめるのだという確信によって支えられていた。ここから、具体的な実例による教育が書物や教訓による教育に代わって重視されてくるが、かかる確信は17世紀中葉以降一層強化されていたに違いない。これを、教養からのジェントルマンの離反という観点から見れば、そこにはおおよそ次のような理由が考えられるのではないだろうか。

まず第一に、「教養ある為政者」理想やその正統なる嫡子である教養の追究が、ジェントルマンの子弟に地主としての自覚を希薄なものにし、土地の管理や改善を怠らせる結果となっていたこと。加えて、「ヴァーチュオーソ」理想に促された絵画、彫刻、宝石などの収集といった消費度の高い文化の獲得が、自ずとジェントルマンの財政を圧迫し、生活の基礎であるはずの土地をも手放しかねない事態を生んでいたこと。オズボーンが学問研究と所領管理の問題とを結びつけ、「所領の正当な改善を忘れてしまうほど、学問に熱中してはならない」³⁰⁾と忠告していたのも、これらの反省からきていたと思われる。

教養の理念は、また、学問を所有することに

よって形成される負のイメージからも否定された。読書にふけること、ギリシア語やラテン語に精通しその言葉で会話することは、内容の如何に関わらず、当時一般にペダントと称された。名望家ジェントルマンはこの評判を極度に恐れた。中には、誤った綴り字を書いていることがジェントルマンの証だと主張する者もいたが、オズボーンは「書物からの借り物だと思われれば思われるほど、お前は自分の持って生まれた才能も示すことができなくなるだろう」と述べ³¹⁾、ジェントルマンが自己の存在を主張する上からも、ペダントと呼ばれることを極力回避するように勧めた。この点では、「訓戒・助言」の書は一貫して内容よりも文体の優雅さ、正しい言葉使いと発音を重んじた。

評判の重視は、友人の選択や目上の人々、同僚、下位の人々、身内の人間に対する身の処し方にもより一層明確に反映されていた。保護一被保護の恩顧関係（パトロネジ）の網が縦横に張りめぐらされた社会にあっては、「偉大なる人々」(great men)に知己を得ていること、良き仲間を持っていること、そして自分の置かれた身分や立場に応じて礼儀正しい態度がとれることが、彼が上流社会のメンバーであることの一種の証であると同時に、その社会で出世するための絶対的な決め手であったからである。助言者たちは、これゆえに、一様に仲間の重要さを説き（「良き友は身内の兄弟よりも近い」——オズボーン）、妻の選択と同様、その選択には慎重であること、また適切な立居振舞いができなかったために高位にある貴族がいかにか失脚したかを、具体的人物名を挙げて力説した。

ところでこの種の教育論は、父が息子に与える「助言」という性格からして、子どもの教育は家長たる父親が責任をもって行うべきであり、それが家の繁栄を約束するのだという強い自覚の上に成り立っている。例えばローリーはこう言う。

「子どもの教育は、見知らぬ他人に任せると、事実上駄目になってしまう。悪く育てられる

くらいなら、生まれてこない方がまだ。なぜなら、それによってお前の子孫は滅びてしまうか、お前の名声と家族に恥を残すことになるからだ。」³²⁾

こうした子どもの保護者、教育者としての父親の役割の強調が、復古期に数多くの「訓戒」や「助言」を書かしていった要因のひとつであることは間違いない。しかしそれが、世帯の宗教的長としての家長の権限を謳ったピューリタンの家族観の影響によるものか、それとも復古後に社会の第一線に復帰した貴族・ジェントリが、その政治的支配を維持・強化するために家父長的家族の温存を図った結果なのか、あるいはそれ以外の理由によるのかは、正直言って今の筆者には分からない。現時点で言えるのは、父親の役割の強調は土地所有の問題と密接に結びついていたこと、またそれが、17世紀に支配的であったヴァーチュオーソ的教養人＝趣味人に代わって、社会の変化に具体的に対処することができる世間人としてのジェントルマンを要求していたことくらいである。

なお、復古期の「助言」を家族－学校の連関変化の相で捉えるならば、そこには興味深い事実が見出される。というのは、上記のローリーの主張にも見られるように、教育者としての父親の役割の強調から導かれてくる教育形態は、一般には家庭教育であるが、ところがオズボーンは、父親から受けたそうした教育は誤りであったと振り返り、息子に対して次のように主張しているからである。

「家にとどめ置かれてきたために、私は最も柔軟な時期の利点を失ってしまった。なぜなら、学校で育てられてきた人々と同じ訓練を受けてこなかったために、私には彼らが有する以下のような経験が不足していたからだ。彼らは、果樹園で盗みを働くなどの計画を立てる場合、町の人々のうわさを抜け目なく調べ、そしてそれを実行に移すことによって、秘密を厳守したり臨機応変に対処したりすることがお手のものになっている。こうした資

質は、後になっては、すべてのものを危機に晒す以外なかなか獲得されないが、彼らは、他人を信頼すればどんな危険が待ち受けているか、自分の生意気な決断に強情にしがみつけばどんな災難が降りかかるか、またやってもせいぜい鞭打ち程度の罰で済まされるであろうということをよく心得ているので、いとも簡単に獲得している。」³³⁾

ローリーの『訓戒』とオズボーンの『助言』との間に内乱があったことを想起すべきであろう。内乱の政治的、社会的、宗教的混乱は、ジェントルマンがこの世で生き抜いていくためには、世渡りの術や実用的な知が絶対に必要であるという自覚をより強固に形成していったに違いない。オズボーンがローリーにおいては欠落していた国家や政治や宗教の問題について事細かに言及せざるを得なかったのも、恐らくこれによる。ジェントルマンに求められていたのは、社会的な名誉や威信のための教養ではなく、地に足を付けて着実に世事をこなすことのできる人間であった。

なお、学校教育の利点を強調するオズボーンの主張は、後にロックによって徳を台なしにするものとして厳しく批判されたけれども、『スペクテーター』(The Spectator, 1711-12)においては、「実務家」や「策略や腐敗の渦巻く国家社会に優れた成員」を作り出す方法として評価されたこと³⁴⁾、このことを最後に付け加えておこうと思う。

IV ジェントルマン＝「実務家」理想の台頭 ——市民階層の教育論——

以上我々は、16世紀の人文主義の伝統の上に花開いた17世紀のヴァーチュオーソ理想と、それが内乱期にピューリタンの改革者たちによって、また復古期の一連の「助言」群によって批判されていくのを見てきた。ここでは、新しく勃興してきた市民階層からの非難と、ジェントルマン＝「実務家」理想の台頭について述べて

いきたい。

まずは、ヴァーチュオーソが家族に残した次の遺言を見ていただきたい。

「わが愛しき妻に……蝶々の入った箱一つ、貝殻の入った引き出し、女性の骸骨、ひからび切った鶏頭蛇尾の怪獣コッカトリス。娘エリザベスに……死んだ毛虫を保存しておくための処方箋。末の娘ファニーとその最初の子どもに……鱈の卵三個、はちどりの巣。長男とその娘に……近年余が集めたバッタのコレクション、上質紙に張られたイギリスの雑草。友人に友情の記念碑として……鼠のこう丸と鯨の陰莖。(以下省略)」³⁵⁾

これは、スティーラーが『タトラー』(*The Tatler*, 1709-1711)第216号に、「ヴァーチュオーソの目から見て重大で哲学的なもの」が、いかに世間の一般通念に反しているかを証明するために紹介したものである。遺言の文面には笑うに笑えない真面目さが漂い、それがかえって滑稽さと呼ぶのだが、ここで重要なのは、こうしたヴァーチュオーソの馬鹿さ加減に対する批判が、ジェントルマンの存在一般にも向けられていたという点である。というのも、『タトラー』はすでに第66号で、「我々は、ジェントルマンという普通名詞で賞揚されている人々にその性格とは矛盾している多くのものを見ているので、その名をもつことは全くもって不幸なことである」³⁶⁾と述べて、ジェントルマンの名称と実体の分離、およびその結果としてのジェントルマンの実質的な価値の低下を問題にし、かつ第207号で、市民社会の実質的な担い手である商人やトレイダーたちこそ「新しいジェントルマン」であり、そう名乗る資格が十分にあることを、以下のように主張していたからである。

「宮廷人、トレイダー、学者は、すべてジェントルマンと名乗る同等の権利を持っている。見たこともない日用品を正直に取り引きをするトレイズマンは、誤った願望を持たせる宮廷人や無知をあざ笑う学者よりも、より一層ジェントルマンであることを主張する権

利がある。」³⁷⁾

一世紀前のマルカスターの時代には、トレイドはジェントルマンの職業とは完全に一致しないという意見はかなり根強いものであった。自分の低い職業人がジェントルマンの仲間に入ることには抗議の声があった。ましてやジェントルマンがトレイドに従事することなど考えられもしなかった。個人的には正直な商人に味方していたピーチャムも、「商人の実践は劣っており、貴族から最も逸脱している」と主張していた³⁸⁾。ところが、復古以後の市民社会の発展によって、都市が法、統治、経済、知的活動、ファッションなどのすべての社交生活の中心になり、ビジネスに従事する人々の社会的身分が上昇するにつれて、ビジネスがジェントルマンに向けた職業のひとつとして貴族の心を捕えていくことになる。『ロンドン王立協会史』(1667年)の著者トーマス・スプラット(Thomas Sprat)は、このインパクトを最も早い時期に自覚していた人物の一人であった。彼は、「今や世界がより活動的、産業的となって」、貴族が「今まで以上にますます運輸業やビジネスに専念している」事実を指摘し、そのすぐ後で、ジェントルマン階層に横たわるビジネスに対する反感をこう批判した。

「ジェントリは、トレイドに従事すれば品位が下がるとか、血が汚れるといった些細な警戒心から、その促進に反対すべきではない。運輸業や商業が、貴族のどんな称号よりも、また礼儀作法(Civility)、人間性(Humanity)といったものよりもはるかに高度な状態にまで人類を導いてきたかを認識すべきである。とりわけトレイドが世界の統治に多大の影響を有しているこの時期、他の何にもまして、彼らにはトレイドを自分たちの地位を下げるものだとして蔑むいかなる理由も存在しない。」³⁹⁾

スプラットの批判は浸透した。かつて貴族やジェントリの次三男は小さな土地を完全譲渡か一代か二代限りで与えられていたが、17世紀に

は穏当な年金しか期待できなくなっていた。出世するとすれば、知的専門職か行政職、あるいはビジネスで生計を立てていくほかなかった。一方、富を増大していた知的職業者や商人たちも、17世紀末に政府が発行した有価証券や国債を購入し、その社会的影響力と威信を向上させていた。彼らの利害（当時の言葉を用いれば、moneyed interest）は国家の政策や地主階級の利害（landed interest）と密接に連動していた。土地所有は未だジェントルマンであるための基本的な条件であったが、地主階級と富裕な商人との婚姻の増大などもあって、ジェントルマンの親たちもこれまでのように息子を職業に就かせることに抵抗しなくなった。ここに、後にヴォルテールが『イギリス便り』（1733年）の中で述べた次のような状況が発生してくる。

「王国の上院に列し得る貴族の次三男坊も大手をふるって商人になる。國務卿タウゼンド將軍の弟は、「シテー」で商人であることに安んじている。……この慣習は、今は少し盛んになりすぎている嫌いがある。……イギリスの貴族の子息は富裕な強力な一ブルジョアにほかならない。」⁴⁰⁾

ビジネスの社会的承認はジェントルマン理想の転換を不可避なものにしていた。教育思想の上で、17世紀のヴァーチュオーソ理想から18世紀のビジネスマン理想への移行に最も決定的な影響を与えたのは、ロック（John Locke, 1632-1704）の『教育論』（1693年初版）であった。彼は、富と暇を有する有閑人のためにではなく、議会やシティで頭角を現そうとするジェントルマンのために教育論を書いた。彼によれば、「ジェントルマンの職業とは、実務家（Man of Business）の知識を持ち、その身分に適した立居振舞いを身に付け、その地位に応じて祖国のために卓越した有用な人物となること」であった⁴¹⁾。このためロックは、歴史学、地理学、市民法、法律、幾何学、自然哲学をカリキュラムに入れ、詩や音楽を大いに軽蔑し、古代文物や紋章学を無視し、絵画を捨てた。そして、大学が

若者の頭を世間に何の役にも立たない「がらくた」、細々とした文法、崇高な論理学や形而上学で一杯にしていると批判した。

ロックの「ジェントルマン＝実務家」理想は、その書の広汎な普及を通して（1800年までに25版を数えた）18世紀の教育家たちの心を強く捕えていった。16世紀に初めて植え付けられ、17世紀に開花したヴァーチュオーソは、これ以後ディレッタントとして片隅に追いやられ、また彼らのギャラリーやキャビネットの文化は、都市のコーヒーハウスの喧噪やジャーナリズムに取って替わられた。こうして18世紀、市民＝ブルジョアの教育論がジェントルマン教育論として発展してくる素地が形成されてくるが、実はこれに平行して、もうひとつの別の人間類型が生み出されていく。それは、17世紀後半から18世紀前半にかけて都市に多数出現した、「伊達男」（beau）とか「色男」（coxcomb）とか「洒落者」（fop）とか呼ばれた一群のジェントルマンたちで、彼らの存在は以後長くジェントルマンの実像を規定していった。

彼らの最大の特徴は、その洗練されたマナーと「奢侈品」の高度な消費生活にあった。ここから彼らは当時「立派なジェントルマン」（fine gentleman）と褒めそやされ、時代の寵児となっていた。外見に現れる卓越さを何よりも優先する彼らの登場は、すでにこの時代、消費活動とそれを通して形成される人々の意見に価値基準をおく「消費社会」（consumer society）が十分発展していたことを示している。

ところで、宮廷の因習を引きずって現れたこのジェントルマンは、最新のマナーと当世風の生活様式の獲得と引き換えに、実は、無知という新たな属性を身に付けていた。彼らは、立派なジェントルマンである限りは、無知であることさえも甘んじて受けた。否、ペダントと考えられるのを恐れるあまり、無知であることをむしろ誇りに思い、ジェントルマンの確かな印としていた。それゆえ彼らは、子どもの教育にも得てして無関心であった。すでに一部の親たち

は、オズボーンの主張に同意して息子をパブリック・スクールや大学に送り始めていたけれども⁴²⁾、彼らは、学校は子どもを悪い仲間に入れ、その鞭打ちの実践は良き生まれの男子の魂を破壊するとして、息子を学校に送ることに反対した。

18世紀前半、こうしたジェントルマンたちの無知と教育への無関心を告発し、教育の改善を訴えていった二人の風刺作家がいた。『ロビンソン・クルーソー』の作者であるデフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) と『ガリヴァー旅行記』のスイフト (Jonathan Swift, 1667-1745) がそれである。彼らは政治的な立場は異にしていたが、共に貴族・ジェントリの政治家としての価値を第一に強調し、学問や「教養教育」の重要性を説いていた。

ジェントルマンの称号を受ける資格がある人々が台頭してきたというのに、これまで傑出した人物を輩出してきた由緒あるジェントルマンの家から、「考えのない度あほう、役立たずの愚か者、べんちゃらばかり言う洒落者、頭の空っぽの伊達男」⁴³⁾ばかりが出てきたのは何故なのか、こう問うて「生まれながらのジェントルマン」(born Gentleman)のあるべき姿を求めていったのはデフォーであった。彼は、遺稿となった未完の書『完全なるイギリス・ジェントルマン』(1728-29年)の中で、その原因を母親の溺愛、父親の無知、乳母の怠慢、家庭教師の不忠実の四つに認め、なканずく、父親たちの以下のような教育観を鋭く批判した。

「学問はジェントルマンにとってはどうでもよいことであり、全く役に立たないものだ。息子には多大の所領を残してやれば十分で、それが頭の足りなさを十分に償ってくれる。息子を学者にすることは、政治学に没入させ、党派活動に乗り出させ、いつかは転覆・没落して彼の存在そのものを危うくさせることになるだけだ。無知な人間こそ安全な人間で、国家の政争に関わらない人間は、悪い指導者や公共の秩序を甚だしく乱す者の中であって

も決して遭難にあたりはしない。」⁴⁴⁾

「無知な人間こそ安全な人間」だと主張するこの態度は、恐らく内乱とその後の政争から強化されたものであると思われる。しかし我々はまた、無知をジェントルマン保身の術として肯首するそうした態度が、息子に「訓戒」や「助言」を書いていた復古期のジェントルマンたちが育んでいった心性のひとつであったことにも注意を要する。なるほどジェントルマンの第一の任務は所領と家族の管理にある。デフォーとこれに異存はない。しかし彼に従えば、ジェントルマンがジェントルマンたる所以の最大のもは、彼らが大臣や州の為政者などの公務に就いて国家に奉仕し、「被造物の栄光、全人類の最も気高い頭」⁴⁵⁾となることにある。これは学問、教養教育、徳によってしか準備されない。しかるにジェントルマンは、「犬や馬を飼い、スポーツをし、酒を飲み交わすことが、ジェントルマンの本来のビジネスである」⁴⁶⁾と考えて、所領は改善すれども頭脳の方には手を付けず、息子の教育にも何の配慮も払わない。そのため証書の書き方を知らない治安判事や自分の名前もろくすっぽ書けない長男たちが多数出現している。こんなことではジェントルマンの没落は進行するばかりだ。商人やトレイダーから這い上がってきた新興の地主層たちを見よ。家柄や血筋からは本来のジェントルマンとはいえないが、彼らが「育ち良きジェントルマン」(bred gentleman)として成功しているのは何故か。それは財産も教養もあり、知性も高く、かつ子弟の教育にも熱心であったからではなかったか。ロンドン商人のイデオログと言われるデフォーはこう説いて、〈born gentleman〉の没落の危険性を指摘し、彼らが学問軽視と浪費の習慣を改めるべきことを強調する。

スイフトの教育論は、彼が主宰した機関誌『インテリジェンサー』(The *Intelligencer*)に見てとることができる。彼もまた、デフォーと同様に、復古以後の60年以上にわたって国家の主要な業務のほとんどが例外なく新地主の手に

移っていったのは何故なのかと問いかけ、その原因を学問を軽視する貴族の親たちの誤った教育の考え方や方法に求めていった。

彼は、その冒頭で、「教育は常に両親の富と権威に比例して悪くなっていく」、これは現代イギリスの教育の一つの公理である、と主張する⁴⁷⁾。スウィフトによれば、貴族の子弟は自然的諸力やその訓練において常に特殊な利点を有している。大貴族が過去において国家を支える主要な柱であったのはこれによる。ところが近年親たちは、「学問で生きていくことが予定されていないのに、どうして息子が学者でなければならないのか⁴⁸⁾と反論して、フランス人の家庭教師を喜んで招き入れている。この「有害な」教育習慣のために、貴族の子弟は「28歳の間と同じように、8歳にして十分すぎるほどの嗜みを身に付け」、大人と同じ品を作り、帽子を斜めにかぶり、同程度のばかばかしさ、生意気を早くから示している⁴⁹⁾。彼らが大学に行くのも単に格好を付けるためにすぎない。早急にこれらの弊害を改めて、貴族は学問を学ぶべし。これがスウィフトの主張である。

ところで、スウィフトが考えるには、ジェントルマン層におけるかかる教育制度の普及や、あるいは見てくれだけのジェントルマンの出現は、「光り輝く」ことを第一の目的とする時代の風潮の中で醸成されてきたものであった。この風潮を作り上げるのに最も力があつた人物として、スウィフトは、対フランス戦争に従軍した軍隊の名士たちを指摘しているが、事の当否は別にしても、ここにはジェントルマン理想が今やその時代その社会を中心的に担っていた人々のモデルに従って形成され始めたことが記されている。

ロック、『スペクテーター』、デフォー、スウィフトによって開始される18世紀の教育思想は、これまで身分や家柄、教養や名望によって確定されていたジェントルマン理想を相対化させ、それを新たな市民社会の価値基準に従って形成していくことを可能にした。教育は、ここにお

いて、今まで以上の力強さをもってこの理想の形成に重要な役割を果たすことになっていく。

註

- 1) 拙稿「18世紀ジェントルマン教育の変容——家庭教育から学校教育へ——」教育学研究, 53-1, 1986, 103-112., 「チェスターフィールド書簡にみる18世紀英国貴族の教育——近代イギリス教育思想史研究の一環として——」金沢大学教育学部紀要, 36, 1987, 1-20., 「ロック『教育論』加筆の社会的規定」同上, 38, 1989, 229-244., 「『スペクテーター』の教育的世界(I)——市民的徳の形成を中心として——」同上, 38, 1989, 245-257. を参照されたし。
- 2) 16世紀には、身分上の区別として、世襲の爵位貴族だけを貴族と呼び、「ナイト」「エスクワイア」「単なるジェントルマン」から成るジェントリをジェントルマンと呼ぶ場合(例えばエリオットやマルカスター)も見られなくないが、両者の間にはかなりの共通性が見られ、またしばしば〈noble and gentleman〉あるいは〈noble or gentry〉という用法が用いられていたこともあって、本稿では、貴族とジェントリから成る支配階層集団の総称として「ジェントルマン」という語を使用する。16世紀のジェントルマンの定義については、Ruth Kelso, 'Sixteenth-Century Definitions of the Gentleman in England', *The Journal of English and Germanic Philology*, 24, 1925. pp. 370-82. を参照。
- 3) Karl D. Bülbring (ed.), *The Compleat English Gentleman by Daniel Defoe*. London, 1890. Forewords, xxxix.
- 4) ヴァーチュオオソに関しては以下のものを参照にした。① W. E. Houghton, 'The English Virtuoso in the Seventeenth Century', *Journal of the History of Ideas*, III, 1 & 2, 1942. pp. 51-73, 190-219. ② L. Stone, *The Crisis of the Aristocracy, 1558-1641*. Clarendon Press, Oxford. 1965. Reprinted with corrections, 1979. Pt. 3 Chap. 7. pp. 672-724. ③ M. H. Nicolson, 'Virtuoso', *Dictionary of the History of Ideas*, IV, 1973, pp. 486-90.
- 5) N. エリアス『文明化の過程』上下(赤井・中村・吉田訳)、法政大学出版局、1978年を参照されたし。なお、カスティリョーネおよびデラ・カッサの作品は、それぞれ『宮廷人』(清水・岩倉・天野訳、東海

- 大学出版会, 1987年), 『ガラテオ』(池田廉訳, 春秋社, 1961年)として邦訳されている。
- 6) 17世紀のジェントルマンの「怠惰」の問題については, Ann Wagner, 'Idleness and the Ideal of the Gentleman', *History of Educational Quarterly*, Spring-Summer 1985, pp. 41-55. を参照せよ。
- 7) パートンの書は1624, 28, 32, 38, 51, 66, 76年と刊行され続けた。上坪正徳「メランコリー・人間・社会——ロバート・パートン『メランコリーの解剖』に関する覚書——」(中央大学人文科学研究所編『イギリス・ルネサンスの諸相』中央大学出版部, 1989年, 317-57頁)が同書について細かな検討を行っている。
- 8) W. E. Houghton, *op. cit.*, p. 52. ピーチャムは1634年の版において新たに「古代の文物」という章を設け, こう述べていた。「高価さゆえに珍品の古代遺物を所有することは, 本来, 君侯たち, というよりも君侯の精神を持つ人々の趣味である。……そうしたものに通暁している人々はイタリア人たちによって「ヴァーチュオーソ(Virtuosi)」と呼ばれている。」Virgil B. Helzel (ed.), *The Complete Gentleman by Henry Peacham*, Cornell University Press, 1962, p. 117.
- 9) 筆者が使用した基本テキストは, 1627年の第二版 *The Compleat Gentleman. Fashioning him absolute, in the most necessarie and commendable Qualities concerning Minde or Bodie, that may be required in a Noble Gentleman.* by Henry Peacham, London, 1627. である。わが国の先行研究としては, 三枝幸雄「ヘンリー・ピーチャム『完全なるジェントルマン』——イギリス・ルネサンスにおけるコンダクト・ブックの一面断片」(前掲『イギリス・ルネサンスの諸相』241-79頁)があるが, その位置づけは筆者と若干異なっている。
- 10) W. E. Houghton, *op. cit.*, pp. 66-7.
- 11) H. Peacham (1627), *op. cit.*, pp. 19-20.
- 12) *ibid.*, p. 18.
- 13) *ibid.*, p. 16.
- 14) *ibid.*, p. 195.
- 15) *ibid.*, p. 138.
- 16) *ibid.*, p. 10.
- 17) *ibid.*, p. 105.
- 18) *ibid.*, p. 69.
- 19) Cf. Richard S. Westfall, *Science and Religion in Seventeenth-Century England*, Yale Uni. Press, 1970.
- 20) F. ベーコン『ノヴム・オルガヌム』岩波文庫, 32頁。『学問の進歩』岩波文庫, 67-68頁参照。
- 21) ピューリタニズムと科学をめぐる論争の概略については, R. L. Greaves, "Puritanism and Science: The Anatomy of a Controversy", *JHI*, vol. 30, 1969, pp. 345-368. が要領よくまとめている。また教育との関連については, J. Simon, "The Rise of Modern Science and Educational Reform", *History of Education*, vol. 6, no. 2, 1977, pp. 145-154. を参照せよ。
- 22) J. Dury, *The Reformed School*, 1650, Chales Webster (ed.), *Samuel Hartlib and the Advancement of Learning*, Cambridge U. P., 1970. p. 148.
- 23) S. Hartlib, 'To the Christian Reader' in *The Reformed School*, Webster (ed.), *ibid.*, p. 142.
- 24) *Milton's Tractate on Education*. ed. by Oscar Broning, Cambridge U. P., 1895. pp. 3-4.
- 25) *ibid.*, p. 10.
- 26) H. R. Trevor-Roper, "Three Foreigners", *Encounter*, vol. 14, no. 2, 1960, pp. 3-20, p. 9.
- 27) トレヴァー＝ローパー他『17世紀危機論争』(今井宏編訳) 創文社, 1975年を参照。
- 28) バーリー卿の『訓戒』は1580年代初期に執筆され, 1617年に公刊。1618, 1636, 1637年再刊。ローリーの『訓戒』は1607-12年頃執筆され, 1632年公刊。以後四年間に六版を重ねる。オズボーンの『助言』(第一部)は初版のその年に三版を数え, 第二部が著された二年後の1658年にはすでに第六版を数えた。Louis B. Wright (ed.), *Advice to a Son; Precepts of Lord Burghley, Sir Walter Raleigh, and Francis Osborne*, Cornell U. P., 1962. にそれぞれ所収。三著の引用頁数はこのテキストによる。なお, わが国における先行研究としては次のものがある。大野真弓「エリザベス朝貴族の家訓—バーリー卿の息子に対する戒めの書—」政治経済史学, 250号, 1987年, 1-17頁。井野瀬久美恵「サー・ウォルター・ローリーの『息子への訓戒』」(村岡・鈴木・川北編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房, 1987年, 72-116頁)。
- 29) Raleigh, Wright ed., *ibid.*, pp. 20-21.
- 30) Osborne, *ibid.*, p. 43.
- 31) *ibid.*, p. 45.

- 32) Raleigh, *ibid.*, pp. 23-23.
- 33) Osborne, *ibid.*, p. 42.
- 34) cf. John Locke, *Some Thoughts concerning Education*, §70. J. L. Axtell ed., *The Educational Writings of John Locke*, Cambridge U. P., 1968. p. 169. *The Spectator*, no. 313. Everyman's Lib. ed., II, p. 442-43.
- 35) *The Tatler*, no. 216, ed. by Donald F. Bond, 3 vols, Clarendon Press, Oxford, 1987, III, pp. 133-34.
- 36) *ibid.*, no. 66, I, p. 459.
- 37) *ibid.*, no. 207, III, p. 99.
- 38) H. Peacham, *op. cit.*, p. 11.
- 39) Thomas Sprat, *The History of The Royal Society in London*, MDCLXVII, Reprinted ed. by J. I. Cope and H. W. Jones, 1966, p. 407-08.
- 40) ヴォルテール『哲学書簡』1734年, 岩波文庫, 62頁。
- 41) J. Locke, *Education*, §94. J. L. Axtell ed., *op. cit.*, p. 197.
- 42) 本号掲載の拙稿「近代イギリスのジェントルマン教育」を参照。
- 43) Daniel Defoe, *The Compleat English Gentleman*, Karl D. Bülbring, ed. *op. cit.*, p. 76.
- 44) *ibid.*, p. 10.
- 45) *ibid.*, pp. 20-21.
- 46) *ibid.*, p. 64.
- 47) Jonathan Swift, *The Intelligencer*, IX, 1728. Herbert Davis (ed.), *The Prose Writings of Jonathan Swift*, 14 vols. Basil Blackwell, 1964-69. Vol. 12, p. 46.
- 48) *ibid.*, p. 53.
- 49) *ibid.*, p. 50.